

49 龍雲寺の中世文書



指定 市有形文化財 昭和62年10月20日
 所在地 岩村田
 所有者 龍雲寺



龍雲寺は古くは臨濟宗で大智山と称し、^{はげだいら}端下平の地にあったといい、寺伝によれば正和元年（1321）の創建で、大井美作守玄慶の開基、浄学天仲国師の開山という。文明16年（1484）村上氏の大井城攻略のさい、寺も焼失、その後、祥貞禅師を迎えて曹洞宗に改め大田山と称した。

龍雲寺が史上で知られるようになったのは、佐久郡に侵攻した甲斐武田氏の三代にわたる厚い庇護を受けたことに始まる。武田晴信は越後国雲洞庵から北高禅師（墓地は長野県史跡）を迎えて龍雲寺の中興とし、元龜3年（1572）には、甲州・信州・上州三国の僧五百余人を集めて江湖会（千人法幢）の大供養を執行したことはよく知られている。

武田氏の厚い庇護を受けたゆえに、指定文書の中にも天文10年（1541）の武田信虎の書状を始め、晴信の寄進状・岩村田御家人衆あて朱印状、勝頼にいたっては書状・判物など8点、計11点の武田関係文書がある。武田氏の滅亡後も、一時的に佐久郡に入った滝川一益（1点）、北条氏直（1点）、天正18年（1590）に小諸城主となって佐久全域を支配した仙石秀久（秀康・盛長 6点）など、当時佐久郡の政治支配に深くかかわった武将からの文書も多く、龍雲寺が武田氏ばかりでなく、その後の支配者からも厚い庇護を受けたことがわかる。

一方、「大田山実録」は龍雲寺を語るに除外できない文書であり、北高禅師の「条々」・「壁書」・「禁制」や、慶長2年（1597）の曹洞宗宗規のように、宗規にかかわる貴重な文書も多い。

指定文書 ・天文10.8.13 武田信虎書状ほか37点